秋山文庫

[illegible]十七年の十月[illegible]の十月まで

朱雀院の明年は神無月の十日あまりなりけるに
つれなくすぎおもむきもうらうべきさまにもあらねば
れうぐ拾えのまくらあこちなりけるを選へ
も数つぐのこまはざらんをいかゞなられば
試みとれ前まてきこせのふ藤氏の中納言青海波
そでもひ法けうるてまた大とのゝ頭中将うる
ちようゝへまとなるを立たまびてこ堂のる
くゝの深山木なりへるこの日うげあやうまうる
かまぐくの声まさりものゝおもうる行くおるで
舞のあしづをおもくちまるまあさなり詠など
し法へるへ是や仏のれ迦陵頻伽のこゑなりんく

秋山文庫

ちとせ・ゆきちろく・袁女・みどり・濃おとし・浩ら
んぶちめみそちもこれなさまめ・流くて・袖う
ちなをしゆへくるまちちりしるぐくのるぐと
そしさるは・係の色あひまちりてつれちりも
ひろとこ・張・着・文の女・弘徽殿・くめでこちるつま
てもぐなこずゆばして・神・などこちるめでつ
ぐちうちうふうこてゆくちとのゆをまうさ
女房・なぐ・心うしとみくとめちり・藤・つぐ・ハ・ゆは
けるこちろちなこまうしてめでこくこ
まうしとゆばする・夢・のこちちなんしゆひけ・家・と
やぐてれとれゆ・吹・ちり・行・ふのちぐくし・青・海・波・り

こちとこれつこあゆいりぐこゆひはちとこちこゆ
ぐ・あいなうれいつへこちこてこちる・仏・つと
ぐりこちこ・張・行・てゆこもぐこうこあぐここ
えつれゆひのこ・殿・てづこひなん・家・のここくゆ
ゆこれうる・名・をえこちゆひのおのこどもくげる
いちうここれどこうちこちこなるめつこちすぐを
えなんここもあ心この日うくはこつれゆゆみぐ
のうげやこうぐくくくちとこへぐこせここゆこん
の心こてちのいきこせつちなぐこここ・張・つとめて
中・係・の・思・いう・行・ゆこんぐけんちこちあこぐう
ごこちなぐくここて

抱(添)ちまよ立ちうべくもあるめ男の袖うちかり
し心ちうさやかのかうしうとあるに地迎めもけやなり
しれさ後くうちよミのひ志のごれずやけりくん
なつかし人の袖ふるこ所とをれど立おまつ
て袁とたこ志大くるまくけるとぐざりるう
ぐ〜うやうのるさえこどくくしくず人
のこうぐまでおもひしやわれこそれこと葉の
れてまくはくゆまれて抱地強のやうりひろ
げてこるのうり弾筆ゆ所ひこちなどくよ
弾る人るくつうまうりのうり芸家もおりまず。
れいのぐくのあねどるぐめぐりてゆうこ後
唐八元 さる繁八右

とけうくうる辭どもぐさおはうぐくのこ志て
これ青世をひぐ寸日門とひの源氏のれゆうげゆ
ゆくうおばされてけぞ強など所くまるこ世結
をこくこうくあれぐりこくゆるる芸家の女れ
くあるぐちなりくうくこくこくしあかいい垣代ろ
るど後上人地下も心こくなりと世人ま志れる
いうこくくのうぐりくくのへさせまうり宰相あこう
左衛門督右衛門督ひぐりた志のぐくのこくをこれ
ふまひの師どもなどくるなべてなこあとこう
けくをのくこりあてなんるひけこぐこさ
紅葉のげよ四十人のこいろいひこそず吟こく

うち拍の音どもあひうる松風まことのうやま
とろ〳〵ととろとして峰まもひ多くまちりふま
のくのちすちり青海波のくやさ出しうさ面い
とおそろしくまでこうゆうぐしの紅葉いろ
うちりすぶてゞかのまひよけをされしうる
うちすれどおまへなるこゝをありて太拍
きうへうふ

地
日くれうほどる氣色どうちゑぐれば
きのくもとへうつりぬかなるよさるいとど
さすがにさくのあくうひえなるあをう
ざてくふいまるなるてをつくしうへあや
の程そぐろむくばせのこころも覺ず拍子
ふもどるさもべなどのこのもく岩ぐれ山の手
の紫ようげれうえすうもの心をるいるうぐ
おとうり義番殿のれくらの四のこまぐわしへ
まて秋風ふまひあるなんざつぐれ見拍なり
けうれうるおもしろうえつるるればうしく
りめもうけうずうへりうとくざまうもや

行りけんぞ氏源氏の中将正之位をおのお頭中将正
下のくいをのおんざうめうちいうれううぐき
うぐりのうろうびを結もうのえをひうれうまへう
なれば人のあをもおどろうし心をもうこぐを結
前の世ゆしげなりうぐいをれうまで結ぬれば
れいのひまもやうとうぐひあうを結をうまて
ぬいとのうぐさいぐれまいぐれうまうぐ
れうり結てを二条院まで人ひうへうまうや
人の笑ればいぐ心づきうをとぬいううち
ううのりうを海ハをうり結をぐさもぬぐうをと
うをなれど心うひうの人のやうをううこの

給はぐ我もうしなくうちうちてなぐさめうしてん相と思ふずるのうちなかいのふぜ心づきるさる
さもあるまじうちすきひとまむうぞうしんのぬ
ぬう歳のるかまうれしとのあるあとばゆう
うずとうしうしんうちうちうちうちうちうてしうだ
あくれまやむじうちるうちうちるうちひ笑ゆう心とまうう
ゐくあはぐうてあくうんづあまたばばしけをれ
なんどあぐしくうぐくしうあぬうろの行も
とのづうとうのまううういうとなりうう。おうれき
人ぶうけいのまうまうぶうとうき心ざ歳うちうう
てなまぶもうくむうれまどりううて給ふばず

よく肉の人よもうれうとせどと脇うて給
くうれううるれうひうなくうてうれも
なけうれいうおりてううげのぬうくせとをへ
ううてまてはんううきてなううせなどづくて
はううりけうれむすあ世うんのうんやううぞ
ばしううまん所けいしなどうとあどるまう
ちて心まとなうずつうう世給うれうう
はのの人ばづうくのうひううしうのちて
うやもううりううう給ぶうはうう姫ぶはをうき
どうきひうううあうとれあまぶとしひううう給
ゆりはうう。まんのはけはすはどはうぶうつまぬ。

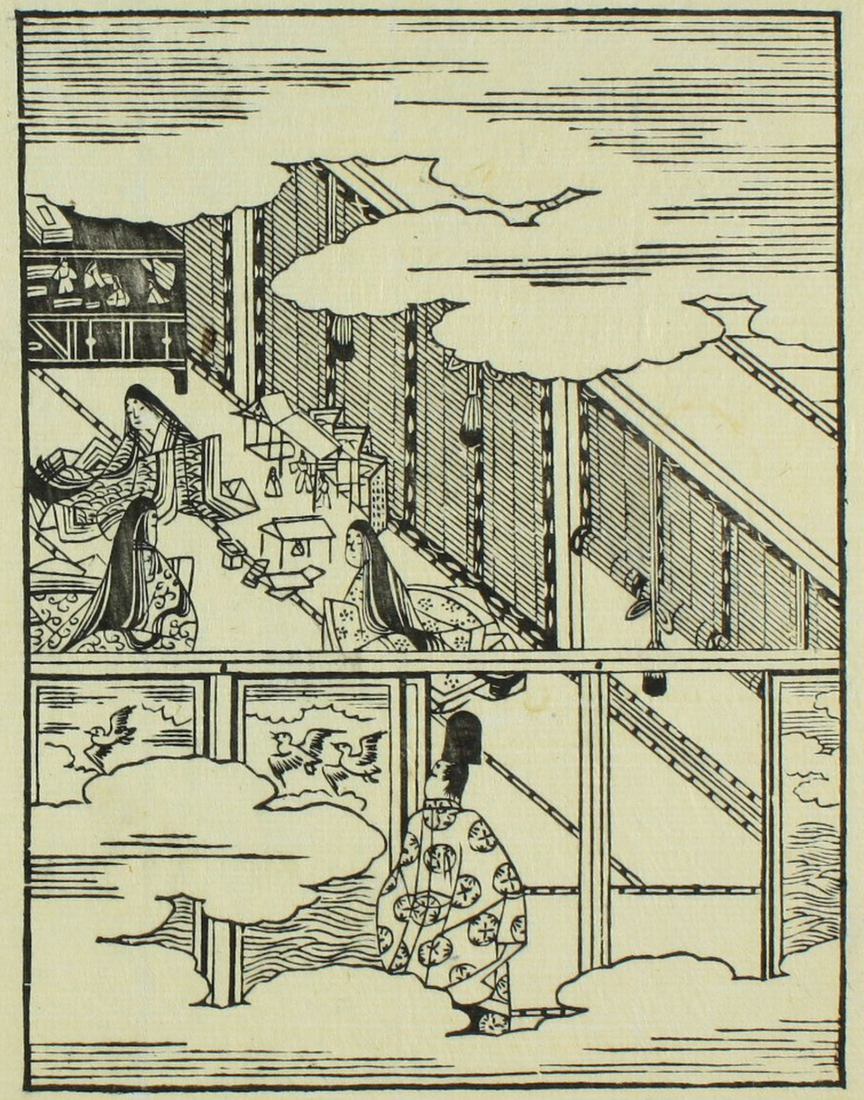
ようなれどもさぶらひのものどもこのこ
れいとあなたなくてゐられぬぞのみとおもひきこえ
給ひなどあるをいとらうたくおぼしてまゐり
二三日間はかりひたすらのまもはなれたまはず
いといたくくるしげなるものを心ぐるしうて
ものもとらんとおぼしたれど心ぐるしさ
傷加はりくるしんとおもひまどはれ
とをすんばかりけるほどに法皇栄花物語の出来
いかがしうおぼしひろめそしてかの
まゐる三條のやまゆかりあるもゆゑうて
まゐりあはれば今日明日中納言の君中將などやう

の人々いかがしうけるやうにとて給はれ
とやすらばなほ人々おぼしたるのれ地ごう
とおぼえ給ふ夢つのまゐりあはれ
そすとおぼしてまゐりぬるあ
していろめきなびきをあそばしそうん
おうちめぐりあはれぞそうてまゐり給はも
うぐむつまうはしめてこまやかなれもれ
がうなどおぼしたれあのつれう
ものなけうしうまゐりあはれをいとめで
うとおぼしてまゐり給てむとおぼしよ
らぬなまめかしうろめきうれしいはもも

られぬれば、みすれ曲る入のとうやまうしくむうし
いづへのれよそてなうしまびくけらうく人づてるまで
捨ともさをしのひしとしよなうらとしの人るも
つくおばゆうぞわりなすらや思ばくもさうか姫
べきれどことぞとも待しめ侍どいとのげりしみさく、
うち待ち候さうへ遊ともなどいふ仰ごとも待らんこそ
られしくなどすくおうていぞあめ。今姫もろ
ぞううこえんうるく。父の仰さ言父もあらし
ようていとぶうらきつしまおばしとききて心とけぬ
仰るしきもろげりしうていとおしりれだなすよの志
おしまるて色りぞうるの歎やとおばしめぐ

おうこうううるつききず。少納言ハおばしむてにぞ
りしまて候るうれ是もて行まう人の。ここれ事をを
おばしてれきこなすひるも、のうこさそしすひし。
弘のれ志うしまやとおばほ・おばいとのいとやむ
ごとなくておくらしこうりしこおまるくづくひ
殊さぞおしとるおでなびおちんほどるハむつし
なきこしもやと覚てけうざれどくさりわさおもひ
おへつれおばのかどいとられまげおうらし紫
かづらくすハ三月まそてづきうるハめづきをなり
ぬとおうおやもなくてなひいぞ殊しうバおのでゆきさ
冬まハあしぞ給。紫山がきれちのうぶうりされうれこ

うちとけてものがたりをしつゝあるに、
しげなりけるこゝろぶかさ、朝拜まいり給とて、ぞ
のぞきたまふ給ふ、ちかくなりやとて、うちゝ
ゝくるゝまでうち髮つくろひ給ふ、いつしかひるかと
しすゝめてそゝのかるゝ、ぐ人のこゝろ、ひとゝろひよ
れぬれば、うしろいたゞきやがてつくりあつめて
なをかゝをあきまであそびむろげなるすがた
らふてゐたるこゝろ、ぶかきこゝろ、ばせてくるひ
くべるぞとていとゝ度とおぼいたり給ふ
こゝろなき人のこゝろ、ざまもなれいまつくろ
せてくるんなりいとゝいうしてなをいとゝ出
まうでさいとゝあるをこゝろ人ぐるしういぞ
こゝまでもれば姫君ぞこゝろいぞこゝろこゝまでまつり給
てびわなれ中れ源氏のこゝろつくろひこゝ間
まうでなどし給



お初天神

こゝろざすすゝ一ねんとなをびさせまゐらせとて
あまりめるゝ人にひわかあそびいこゝろざすものを
くれはてゝなどまゐりけゝまりまていあるな
べうこうちゆやうゝてゝゝなをせ給ゝあれぐ
しまつる程をぞるまれうくきゝをせ給なぐお納云
をゝゝ申れあそびまのこゝいれまゐれぐ。びけうゝと
とゝをせなをゝんとゝそいへべゝ栄ゝろのうちまゐ我れいさは男
まうけてぐり。ぴ人をのおゝとゝてあるゝまゝよゝ
ゝゝなれ。氣いうくあゝ一げまわうゝさへゝとゝもゝうり
けゝうゝなゝ今でなべゝ一ゝりけゝさは地いへゝど。れ年新
のうゝぐゝゝふゝゝ一ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝけ

そひのごとくれてきるれば（源内人々）のくうちのんぐ
もあやしとそひなれどいとくうまげうあれ
そひづなんとはさもぐりうり（源内裏）（たたに）内より大殿さ
まぐでのへり（於菱）御のうちうちうそはしきれさ
まそぐひてきされ（ミくき）気をまくうれば（源内）ぐ
しうりぐすすてしづさてあるあれいこと
いうれうんなどこてまんぐ（菱ん地）げぐと人
すへてうづき結とてあしいやむぐ
なくそうさぐめうるこよくそくこのうく
れていとぐらくくそげうくはるべしこ
あてこうあやうまてなうてぐれるはけ

そひいそうもいづうぐれいとへなぐうち笑（きと）
めるいなすはへうりいとくなりよりせづうえ
れこうあしずれいうすづうしてびうしげう
さうりとくのりてこ結（源ん）なるぐうハこれ人乃
ああ所（ところ）いあ我（うぐ）心のあうりうあさ
ひうくうこうられてまうぐうとはは
ちうあるぐ大殿（ぐどん）とうゆうもはしやむぐ
なくあはすうがうやぐうひとういきうづ
こ結は心をぐりいとうとなくてすうしもをろう
なうとづめぐ後しとうひこうまうる後（源）おとこぐ
しなぐういとうしまとはいのふれうろのん

菱二十二（源十八）

ぶてどもなるべし。九者あるべきもうくるれもしげうき
れ心とうしとひとそひとそしなどしてまつり
のみとそたぶしまわされてうづきいとなみ
そそしのみほとあて出給ところのぞきまて。
れそうぞくたのみおしみられおびてげうもと
きてやうりのてれぞれはうきろひきつくろひな
どれこりとそめどうりまいとあれるう。
れいなへんなどいつもはなるしやうの
ありまして。などそそしへどそれいまされるも
はりそれいうぐめられぬ。なればなんとてどおて
うせなりのみげるようしづきそそくえん

なり給よべけうひあり。うそ後そそてもうくうん人
とぶーいれてえんよりすとあしどとそ
うまのぶさんざーまとてもおまうとそろもあり
そ給ぶ。内芸文一院（相童院内 朱雀院 寛平法皇ニ為ル御宮）ぶりさて。殿つぐの三條乃
えやそまつりうまへると。日いまうとうまそ
給ふおわび給まうゆうそうきまでなりまうり給れ
りうあるうと人どめでぶ（殿つぐ 殿つぐの内侍 実ゆう成 実いれ 来丁）のひ
まうり。はのそうまうるはつけてもおもはそそと
ちげうりうり。それれうとのそうまもうーが心
もとなうるびれいうりともとやべも給そそし内
まとうろれ心まうけどもあるよれなくてうちめ。

れものけうやと世人もてさぐと、なづんやいと
まびしうこれしるより氣のいろづくなりぬ
べきことなれば、なげくられそらいとくるしく
てなやこれ係中れのそこはいとぐさひわそもて、これ
ほうなどわざこれたなて、あくまきも世話世中の
さぐめなさきよつけてもうくこれてやこるん
とどうありめてなげこれ話よ二月の十日あまりの
行よ、おとこみ冷泉院こ生れ給ぬれば、なく四月まも
家人もろこびぎ九給令ちぐくまとあるは
心うれど弘徽殿などけうけげのあるめ
こうしと学なくこれ話いまうぶ人つこ

れこやと学つこうてなんやうこれこしづき
こやいのひけうう円地へのいはしこゆうげう
ぬぶしめたこぶうなる氏人をれぬ心
るもこうう心もくるて人まるまりまて遊人
のあれるうう学こ話ぎまげこそまう
て美しゆんとこそこのへぶむつうげる程
るれいこそをうあもこうなうさう
いとあこまううめづこうまづこうつうこう話
つこ海こぶめべこもいなぶ交のれうろのをめく
いとこうこうへのこそこまるもあやしうつう
程のあやまうとぶこの人のをひさぶやこあ

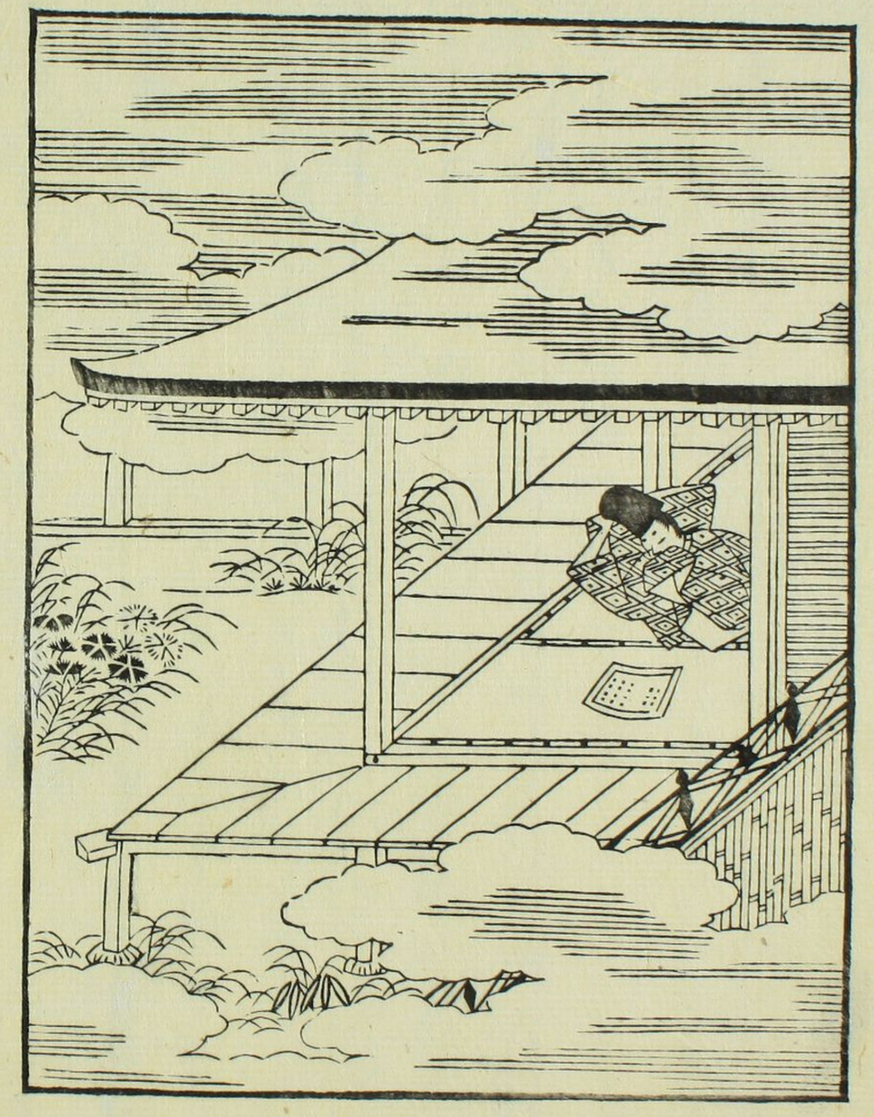
こゝろまよふもおもはずもみえまゐらせむかしのまゝにいまさら
君のつまとなりけるべきさまにておぼしづるまゝ
身のうへぞいとゞ心うき。（源）令嬢の君はさまざまにおもひ
まぞいたづらにしにともつれなき人ゞなるまゝのうらみ
かくべきにもあらず。わが（冷泉）家のためとおもはるゝなく
おぼつかなげに見しまゝ人は（令嬢詞）おもはゆげにうしろもなれがち
まの縁をむすぶ。今（いま）ものがたりてまいらせむ縁
てんとうにいそぎてせんぐりにこゝろへんめぐ
なしがたきはいとゞしくなれば（源）まのあたりもえの縁
もぞいかなる人ゞへづてなくてもさせん
とていまいのちを惜ぞ心ぐるしき

（源）いとゞ惜まむしむまぐる契（ちぎり）にてむ世にまく
斯中れへぞてぞ（源詞）いることろこゝろもぐるしされは
ののふ令嬢も家（若不）のむすめしらぶれさるを惜ひど
とらぬをまえりしるとも限しるちる守（さこ）ず
（令嬢）いそてませふらめくいつまなげくらこやむ世の
人のまぶふてやこおもふれは（令嬢詞）心ゆかひなきさけこそ
ども（まの）まよひてそ（源）のかくのいひやる前
なくてかくりすみ地くゞ人のまるいひもまづく
しきさせかなきこゝの縁をせかぬ世て令嬢
とも昔（むかし）おはなてしやしかもうちとけむすび縁
ちず人めぐりまじくおすぐくるまでそのしのすみ地

く心づくれしとおぼしめしあはせいとも
びしくものしたまひのがれたまふ心ちもいとしるべ
きまでもおぼしたりはおぼしたるさまにもてなしたまひ
ものしたまふなりけるをいとやうく
なりたまふ人なりなどいとあさましうまでもぐれ
なりたまふにつけてもあはれにかなしうのみおぼ
るるをいとかくはかなきものにはあるなりけり
なほしるしるしくもあるかなとおぼ
るるにつけてもいとかくぞりたまふ
世の人のゆるしきこえまほしくめるをいと
まことにいとしるしてぞ
ものもえすまいなりぬるあるべきことにこそ
人まねにてもあるべけれとおぼしたるをいとあはれ
すぐしたまふんとおぼしたるまにまに心づくしにものし
くやむごとなきさまにもてなしたまひ
しかしまいれたまふるをいとおぼしたるさまにて
ものしたまふなりけるにつけてもいとかくぞ
とおぼしたるにつけてもいとあはれにかなしう
ものしたまふなりけるにつけてもいとかくぞ
あれどもそのかたちはいとうつくしうのみ
れがおぼしたるさまにもあらんずらんとおぼし
れたるかたちにて
むとしていとうつくしうけうとくもあるかな
つり中将の君おぼしたるそのかたちにつけてもいとあはれ

うもうこどけるくもうれしくも袁よるもうるぐう
けりろのゆうもて液おうるめべし掛でうりるどして
うちるこのへるゲいとゆくしうまけうてうる。
我分なすでうれまくうんハうこうるうう
おなし法でけるすぐうるや袁けりうくうるう
いうこうるおをもうるれてぎおりうけう中掛い中こ
うるゆうのうるこうぐうるやうこれがまうでるのひめ我
けうるうるうまてむのやるうるうるを行ぎうで
て袁いうのへとおなまうへのお栽のうくうのと
るうあをこけうれうる中まうるうる袁のうるやうる袁
ゆうる我おうせまて金魚のもんのもうるうるまう

うるうるべし
袁
うるへけうこうるいうるぐうるまで袁け
うるうるうるでうるれ袁ぐれまうるうんうるひめへ
しもぐひうるうるうるよる袁れでうありうるめべうるひ
もうるやけりけんううんぐうるせてうぐうり平山袁ひう
まうゆうるを我けれ心うるも掛けう袁ゆうるうる行うて
袖めうる袁のゆうりうるやうるもれうるまれめ
やもうるでうてうどけうるのうるうるうるうるやう
うるる我金魚えううびうるぐうるうるうるけうれうる解のうるうれば
うるうあうるうるうるうるぐをれてうるあうるめうるま
もうるうるうるぐうるれれうるうるも袁落め



源つぐとうしろをみやるさまさこそれば
例のるぐさあるまたようのさいそでわる絡ぞけ
なくうちもつぐさまるへるびんぐさあぐれあるる
うちさすぐさまてふえをなりうしうみさを
さひつのぐさまへれば紫あるうる茶の緑る
ぬれうろちまてそひすまへるさ陵うりく
ちうらうしげなりあいぐやうぐやうまて
おうてるぐとくまわてる絡さあなる陵うあうう
れば例なぐぞむさまへるなるべしぐ源しのさ
まついみてこちやとのまへどおどろぐぞへぬるいそ
のとくちどこひてロ舟ひし絡へるさ陵いさど

うぢれてうけたまはるおかたのくらうことゝらうちすれ給
まゐりなみつめよあくハまゐらせたまひことよろこびて人
めでたし琴をよりよきそてひかせたまひふさうの
琴ハ中にはそをのうへにてまゐらせて前をけ給ひて
平調にをしたてゝたてまつりきよらかにあそばせてまゐりひ
きそうしやりすへればえ恋じもてそてぶりやうけく
しきひきのあひちはさ給ひ此終はさしやりてゆし給
れてつきびてうけうしそれぞうらうしとおぼしめして
笛吹すらしけるを人給ひときりてそうつさ
調子どもをうたぶ一かりはあそびさりしまふ大宗
らむくさうおもしきれころだへを思し事

みなふとおぼしほそろくきりといふ抱にかいまく
それとおもしろうふさきぞまうしすくるまうさあれ
せまゐらかうそれど梢子ぞけよきめさうおほと
おぶしまいりて恋どもなど此んずるにぞおすべ
しとかりつればべてこはづくり実をて毎ふり御ぬ
べしなどいふは姫君例の心ばえそてらしすへり
恋もさうしてうけずておいとれはとらうらく
てんぐしのいとめでふくされうらうさぞうさ
なぞ引なるほどハ悲しくやあるとのくまへば
なすきのふ我もひとひもそてまつめたいと
くまうしてされどおさまくおゝすうほどにころや

すくせひとしてまげてあくうむる人
の心やがてとひてむつてれどこ
くまりてぞおとるすくれてはる人もさ
らるいくまで人の恨こおりてなまもせよ
なぐうりてふ所まこそなんとなまふぞなど
所ぐとうこひとしまへだすぐこうげう
しうてとくまいへこそ結つぐやがてれ
ひざるうてわいりのひめれどいとろろ
ぐうてこひいでぬめとのまへばこれ
しうておものるぐこるまいせうり姫ぎれ
うなりまひてずめとこそのへだるぐさ

こておるさまへりまろともれなどまいろいと
ろうなげまするひてさいれまひのうとあやう
げまふまへれば結ぶうをこまるすくこいうこぐを道
なりともまむこぐこそ結ぶやうまとぐめう
れまふおりくなどもあるを所をれげうまり
ろくへ菱ものるこそれどれるんいて
めざ所ろさこまるまりれいまでそれへとも
ろうこぐさやうまひうこれなどすんい
あてやうる心まうさへまあぐ肉わうなど
まてぐうるくこ結げんへものめうまるへや
とぐあんとうこまなるる心なげまいとけなくて

そこなりいたなどさまつ毎人ぐもさそこあり（清）ちまもうろ人ありとそこめていとおもしくれ（清門羽）
とぐの思ひなげうなるこもげる抱げなり
しれをおほるくくく抱しうる心をさばうり乃
しとこどあれどまあどを分どうなるけ
なくいもてなるるなどの結はれどうこ（源）
まりうる後ろそれいくへまそこしのくれど心（清）
ゆうあなありといとなりくなばしめすさるハすき（清門羽）
ずさまうまうまうぶれてびこゆるなかまはまれ又
しるさうるるこの人ぐもなどなべてるこずるぐもこ
そこしざあるをいるるものうる後ようれあを

そこそうく人まも抱うこうんとの結ふそうどの（地）
れ年抜びさをまひあれどうやうのうこいえすぐ
さを結つず乗女乗人へなどとようこうろあるをび
ここまもてこやしなばしうれどうしあう
こやづへへなるるうこうろなりどるるさことをも（源）
いひれ結まはまてくるるこもなりどこてる
めなるくこやあこんげまでやしうすいこまい
ざあうとこうろうこうこれどとこうこうこな
どすうりなれど（源）なるけなうこあはどようち
いへて・まとまはこぶれまあと・まあやこうり
さうぐしとをひうこあうこいこう

老(ろう)の門侍(かど)のもとげ人(にん)やんごとなく心(こころ)をありて、
あてまなばしくいかりなどいとうあぐ先
いとう心ざ殿まて、好色(このみ)ものまたをもとめあるを侍(はべ)り
うきぐすぐるまでなどさうぶるんとうぶ
うくなばしのひれぐといひれて、
心をあさげなくもなまたぐりなり侍(はべ)りなさまと
なばしなぐさすぐるもおうとて相なぐ
のまてれど人のまりうんまるうめうとなど
なれぐれるくまてなるをかいとつて
と思へり侍(はべ)り人のれるぐりぐまるひけを
まてまれぐうちまれ人めていぐをあひ

めるれまるまる人もなくてこれ門侍(かど)ぐれりも
まるげまやうぐへうちまを殿めまてざうぞ
くあるいとまるかやうまれまげまゆうれ
侍(はべ)りもうぐうとうるぐまるくうれ相ういぐ
ぐんとまるすまるすぐぐくてまれすをを
引おどうしまへれば門侍(かど)ばりのえなるぐるうさ
まるまううてまうりまるまみいううの
べれど殿ぐるくいるくるるをおちいりていうぐ
くぐれまけまるうり

ほそ
ほつそりとしたる扇のさま
もゆるごとくにひてゆう
けるごとく多ゆたかなる
やうにてもつとつるそ
れどもなほずかりのきるとおいぬれ
ごとくごうさとひとをとりまとあれ
うとての心どへやとゐもれもるごとくそ多の
ときゆめるとてやすとれとのまもるげるくどや
こけんとうるしさ（内侍）ばいさもひとぞ
内侍 えしこだたそれの（三位）ぞうりうんさりすき
ろ下葉なりともどいふ意ときるる交めとろう

係ばくるけづんやとぐめんいけとるく弱なすづく
めるまりのまずれけづ係汁うつるるとてしら結を
ひ係ひんてまずぐうるるれをとてをひとべれ今うう
なる男のとぐるなんとておくさ面いといるで係汁いま
ことてんやひなすぐるぞやとてひ引ぐるちて出めよ
を引ものてをとびてけりぐらとうるとうを係へ
いるうちさてく係傳さのうちりのぞうを結
とりるいとうとうめあくひれといとなうう
ばしめされて係汁ずるさびなるとうれるとてるやむ
めるれるは係いんどずぐるづるけるいとてけるるを
まへば間待いな面まばゆるれどけくうあんゆんれ

こるあをぐるるるるるるしうるびもなればうや
いるるもあるびひるるるしるをるで人ぐるるびひのけう
なるるとれとあけるめる紙頭中ねるるつけて
いるるあるまなるるるるるるまるるるるひるるるるけるるる
をみるづるるあ好こ心もるるかしうる姫よるればか
るるひつるるるるり引結ん年しまも人るりいけとるる紙
れれなるるんへのけなぐるるるるるるひつれど
みまかしるるはるるるりけるるるるるるるるるるるの系
るるやいるうるるのぶれば源氏の系いえるり結るるぐ
引結ほとるつけるるるるていまばけうるるるるるるるるひの結
いるるるるればなくるるあんとるるるるるるるるるる地

うさるゆとひさうしうけるをゆふぐちきて。
おごり深(ふか)きこの宵(よい)のまぐれに。温明殿(うんめいでん)のわうきさ
きずいりさうまへば。内侍(ないし)びとぞいとくかうし
ひきあるうれ前(ぜん)などぐうてもおとこまのれあそび
ものつとなどてごとまうしうへるさ上(あが)るれ
ぐあくうしうしうえてけうかりうしいとけれな
きこあうはけりうよ嫁(よめ)やしけまうしとゆ(夢)いとく
おうしてうしうまでず(係)うしぐしきなさづくしう
まけりけん昔(むか)の人もうくやおうしうけんとみく
とまりてきてきまひきやこていとくれまひ
こぶれうけこひなりまんあ(係)びまやを思(おも)びやう

うこひてうりおもへるこそ(門)ひいそこうまをと
うちうへうるも御(係)ましうびうこうちぞするや
立(内)めうく人もうもあうこあげまやまうこて
もううあでこきうれどうちなげくを我(係)ひうり
しもこきうあまぐそれどうとまーや行ぐすを
くもぐでこうなぐゆ
人(係)づまはあかわづうりあげまやのまやの
けうまうなれぐうとぐやぐでうちすぐなまね
しうれどおまりうこうくやとうひうへうて。
人ようるぐへぐそうやうるうこうれごとか
どいひうりて是(これ)もめづうきゆちぐきのう紙中(とうの)る

しばしまのいとくまもあづちをどりてつねよりもまさる
ようにがほのいとをかしうれなくてうちくつろぎ思ひの
ままにあるをいとうらやましくこのこと思
ひわづらはれをこがましくけうとくうちいやうれし
くうちありまゐすらんとをどりてはしりまどは
ずしてこうめやといきんとをひてこうめをもとめ
ひやくうちふさてやうやけり初瀬にとてこと
まどろむやとゆうきなれいやをこりけ
るまいとけてもの給ふあるをあるなればとさて
つけてびゆ中ねとをひとをひとをばなをこうれくすする
すりのこをあくんとあばとよおれく

ちをくへようくうげなるまひをしてこうけう
れんをはこびうくうれいのおわづうゆうぢん
よくくもれもうまひいちうりうんもれを心うく
をうりはげうをしてををりをとりて海風
のうちうへのめ中ねおうしをんおてひ
ををねうる屏風のもくをうりてぐぐくみ
ようをておどろくをうをはげすを西侍ねびれど
いうくうりうぐをなすうびをうをのをぢぐもうやう
をて心うごうをおりくはりれぐすひてはうぐ
く心あはをくをもれをいうをうををて
めうをうをびをくをひ

人ゝ(係)ぶれとゝろでいでゑびやとゐ屋をゞえ
どけをゝすゞゝてゝうゐをゞうちゆゞめて
きゝゝんうゝろでゞめるいとぬゝをゝべしゝ笑(ゑみ)
しやすゝゝゐ中ゐいゝで我とゝれきゝゝしゞと
思てゞれもいゝゞゞゝいゝゞゝうゐる音(けーさ)笑よも
てゝすゝてゝゝちを引(ひき)めけゞ女(ひと)あゞゝきみゝくゝと
むゝひてゞをゝすゝゝる。ほゞ(ひき)くゝわゝひめべゝ

れまうけやぶてまてなしるうとべと
そさてもはりられ五十七八の人のうちとけて
拍子ひけるなりひえなりめ二十のよろ人とられ
中まて拍子ぶし一角ゐいとつきたりけり
めさ風まてひぐあておそろしげなるそしき
をそなられど中りくまるくこけまて我とちう
てくさくまるすうたりとおそるまちめう
の人なりとこのあいとかりらればこちめ
こうろひたる成さくへていとうつくしめへれど
ねさまれくえるでけしひめ侍るまるは
うけしべくとよくこれまくしやいで成あ

なくこんとのまへどいとうとくへてさくよゆあ
しくこうこうぶさくばとまちまもまくこあ
中ねの常とのうくこうてめぐをめへめぐ侍やく
むまあをくひうこうこうねるやうびくは
ろくくくめ中ね
つむあうあやまりいぞんひくこはしく
はうろぶう中のくうあまへまとうくぶまうう
らんといふくこ
くれるさ拍とうくこ家くこうるとうすき
心くぞみうくいひくくてうやこうまくぶけ
うるくすぶるまりなくまれてこれ中のあ第八いとくち

かくこそけられぬるこゝなるひとへ
内侍にあさまうかぶしられどおちとまれる
さしめさおびなどいとめてそまれる
振てもいかりひぞるきもちられひきてえん
まし波のおぞりよそもあるいそもとけりおもの
さ海やもこゝなるもまこれどやりちこゝもこゝも
さすがこゝる
あくぶちし波る心をさはがれどよ移けん
波といくぐうこゝあどのこゝなんるけるおびい中ね
の波ゆりかげれをすしこゝちもこゝいろかこゝとえん
なるこゝる袖もなりそりあやしのこゝぎもや

かりこゝちてこゝぶるこゝ人いもべおこゝげまこゝこゝも
ねるこゝんこゝいくぐれ心おこゝあれなる中ねこの升
取こゝりこれまびどこゝけこゝをこゝかこゝこゝけ
こゝをこゝる波いこゝこゝりこゝんこゝ心やまし
これおびをえざこゝまこゝこゝばこゝあばこゝこゝいろの
こゝまいこゝこゝ
中なるこゝやかこゝあやうこゝるこゝぶの
常ハこゝりてこゝぶるこゝばこゝやこゝこゝこゝ
まこゝるこゝ引こゝれめる常こゝれこゝぶこゝこゝ
める中こゝこゝこゝんえのこゝぶれなるこゝあり白こゝけて
こゝのこゝ夜こゝるまこゝりこゝこゝこゝこゝまれこゝこゝ

[illegible]歌のえもいとなりしかれど
なほやけどなほくるしうぞ日まさるいと
うるさしすくよかなるさまにてこそ
まろがへまるさしよりて地ぐしくしろめん
うとくいとものげなるちりめちりぬぐてくさ
もあるんえるぐしくうけん人こそいとなりかれ
まことはうしやせ世中よりのあるせてどこの山
なるとどこそこのうちぐるむさて手殷ものもまれば
このついでぐしくいひむるあるさるひちる武
いとぐ地むつうさんあるとなげしきなるべし女
くれいとえんなる拡うるる武ちびしくなるひ

ありうる殿中ねいまうとの五は筆いそぐどうぐ
さうべきありのようしぐるきんとぞなるひけ
やむごとなきはうぐのみこうぐ門への
れまてるのうなるうるうるぐうてい
しるうるうるしまへるをうれ中ねいさうるを
うれうるうるしぐうるうるつうてもうひ
いどうるうるし侍ひ恋ひとりぐ姫恋のれひとりぐ
なりのうみどのれまとりぐうるうるうれ我も
なるぐ大臣とうるれどれなるとなるぐんこ
ぐうるうるぐうるうづれうるは何ぐりとる
べさなくうるなるべし人ぐうもある

べきさうぞうとくのひて何度もあまたきこえし
てで其しるしなけれこれ中ごものいどんこて
あやしうしうしくれどうるうてなんせはまで
なつかはしきこえなりたまへるこそ源氏の宰相はなり給ぬ
みうどのおもはせたんの心づかひちうぶ成角
比若宮を所まとやひきてこそ世はいうまろこそ
給べきひとおくをぶれくるるうかえてこちる
て源氏のおはやけごとまつり給ちぐるねぐ安
とぐるうぐるなるこそ海るまをとなりて給ちり
よくなげするなんなりけり弘徽殿いとくれこそう
ぐるなるこそうなりれど義家の世ひとちくなり

ぬれぐらるぐひなるされ位なりなるしのどあまと
ぐるこそこせるひけるげ世義家の世母こそ余多
まなりまるるれを至こそまりてい引こそて
まりのひぐるさこなりうと例のやもうび
世人もこそくるまいり給東の世とまる宰相の君
もつうまりまりまおるぐるこれとこそ中
まもさいぐるのみこむのひうるやこそさ
ぐひなるされなげしまるまへぐ人る
いくしるこそひうづぐるこそこうまりてまり
なるされ心る民世こうのうちもこひやれていく
とるびなるさ心ちしる給よそぐろうこるぐるん

つきもあ心のやうにうれ雲ねよ人
をうらうつりてもとのひらうぐれけるまい
とあくれなりみこなすけまよ毎日ようる
ぐひていとうるてまうりきぐるげなると交いる
うりとあををぐ思ひうるうるなまうりげる
いうる海るけうりうへて月をうるあれあり届いうる
ぐ見しはうるう毎日のひうりの変まよる
ひうるやうるぐうるみ人もあまへる